文化

沈黙に向き合う

沖縄戦 聞き取り47年 〈25〉

石原 昌家

那覇市民の体験記録

感情風化 重い口開く

深い心の傷に触れる

琉球政府・沖縄県による行政主導の沖縄戦体験記録活動に続き、那覇市は1971年、沖縄戦終結25年を記念して、市民から戦争体験記を公募した。その原稿をもとに74年、『那覇市史資料編第2巻中の6 戦時記録』を刊行した。「これは沖縄の市町村史における初の本格的な沖縄戦資料集でもあった。沖縄県史が座談会など聞き書きを中心にしたのに対し、那覇市の戦時資料は、住民が自分自身の戦争体験をまとめるという市民運動方式を特徴としていた」(真栄里泰山「沖縄戦証言の記録 市民運動で体験をつづる」那覇市歴史博物館編『戦後をたどる』琉球新報社、293ページ)

那覇市民の戦時・戦後体験を集めた「沖縄の慟哭」

三三回忌祈念事業

それに引き続き、那覇市は1977年4月から、市民の戦争体験記録運動に着手した。沖縄戦戦没者三三回忌祈念特別事業として、平良良松革新市長のもと「那覇市民の戦時・戦後体験記録委員会」が設置され、3カ年にわたって大々的な記録運動を展開していった。それは後に『沖縄の慟哭 市民の戦時・戦後体験記』(81年3月、那覇市企画部市史編集室発行)の「戦時編」「戦後・海外編」2冊として発刊されることになった。

沖縄戦を考える会の池宮城秀意会長が、その記録委員会の代表も務め、28人の委員のうち、副会長の安仁屋政昭さんや私を含め4人が「考える会」から加わった。那覇市の大がかりな市民への呼びかけは、メディアもニュースとして大きく取り上げていったので、市民の戦時・戦後体験を記録したり、語ろうとしたりする機運が一気に高まった。その「体験記1、2」に私は座談会司会2回と聞き取り調査14人分を掲載してある。

聞き取りの依頼

私は、それまでは常に体験者を説得して聞き取り調査を進めてきたが、那覇市の「戦時・戦後体験記録委員会」の事務局職員をとおして、市民の依頼で聞き取りするということも初めて体験した。

また、『沖縄の慟哭』には、那覇市民ではない本部町在住の城間(旧姓金城)素子さんの「第三外科壕から生還」(331ページ)も特別に掲載した。沖縄戦のとき、県立第一高等女学校3年だった城間さんは、日本軍の看護要員として動員された「ひめゆり学徒」だった。ひめゆりの塔の第三外科壕でガス弾攻撃をうけ、奇跡的に生き延びた一人である。城間さんから聞き取りをしたきっかけは、私の著書『虐殺の島―皇軍と臣民の末路』(78年、晩聲社)を彼女が息子さんを通して手にしたことだった。それに掲載されている女子師範の瀬底(結婚後大城姓)絹さんの「ひめゆり学徒」としての体験を偶然読み、それに触発され、私に手紙を書いてきたことで聞き取りすることになった。

『虐殺の島』に掲載した瀬底さんは戦後、中学校の教壇に立った。瀬底さんが映画「ひめゆりの塔」で有名な「ひめゆり学徒」の生存者だということを知った生徒たちは、その体験を聞かせてほしいとせがんだ。しかし、いざ体験を語ろうとすると、無惨な死を遂げた学友たちの顔が走馬灯のように浮かんできて、涙があふれてとても話せなかった。瀬底さんは当時、新婚間もないころだったが、戦場を逃げまどう夢を毎夜のようにみて「キャー」と大声で悲鳴をあげるので、びっくりした夫が飛び起きるということが続いていたという。

1974年7月、瀬底さんがその体験を語り終えた時「あれっ、いままで語ろうにも語れなかったのに。いま、先生に小説の筋書きでも話すかのように話している自分にビックリした」と、当惑されていた。ある一定の「感情の風化」がないと、極限状況の戦争体験は一般に語れないのだ、とそのとき私は認識した。

代理受苦

「ひめゆり学徒」だった城間さんは78年11月、私に二度も手紙を書いてきたので、いま、語らねばならないという思いに駆られているのだと推察し、私は本部町の自宅へ聞き取りにうかがった。長時間、言語に絶するような体験の話が続き、最後に「戦後3年目に職場のひとたち数十人とトラックに乗って島尻へ行ったことがありました。私は自分が出て来た壕の前まで行ったのですが、死んで行った級友たちの最後の叫びが聞こえてくるみたいで、その後、最近まで行ったことはありません。あの壕から一緒に生き延びた4人が、その後一緒に顔を合わせたこともありません。あの場面を思い出したくないのでできるだけ顔を合わせたくない気持ちなのです。今でも一人静まり返った家にいる時、あの時の叫びを思い出してしまいます。戦争の話をした日の夜はなかなか寝つけないです。『ひめゆりの塔』を扱ったテレビなどを観たときには身体がだるくなって、病院まで行ったこともあります。自分が幸せだなあと思う時ほど、彼女達も生きていたら、今頃子や孫に囲まれて幸せじゃなかったかなと思ったりします」(『沖縄の慟哭』、339ページ)と語り終えた。

自分が今、幸せだなと思った瞬間、死んだ級友たちの顔が浮かんできて、幸せな気持ちに浸れないと語る城間さんの心の傷の深さは、底知れないと思った。すると、私は耐え難いほど頭がガンガン痛みだした。「それは新聞記者も凄惨な事件を取材したとき経験する〝代理受苦〟だよ」、と現在進行中の「連載」を話題にした折に比屋根照夫先生から教えてもらった。

(次回は26日掲載)